

学部長挨拶

狩野 陽

北海道の夏の朝、社会情報学部シンポジウムにご参集いただき、有難うございます。

遠路をご光来のお三人の方にお話をいただくことになりました。ご足労と、そのご努力を篤くお礼申し上げます。

このシンポジウムも五回目、学部創設と共に始まり、この春、学部は完成年次を迎え、この会合も、同じ年を重ねました。

「社会と情報に関するシンポジウム」という非常に漠然とした題でこの五回を続けてきた、その続けたということは、なかなかえらいものだというお褒めを、さきほど中島先生からいただきました。田中一先生は、いやこれは丁度、本学の予算作成時期に重なるのでそれで続けているのだと謙遜されましたし、あるいは研究委員会の人達ならば、まあ意地で続けて来た、伊達な意気地に託すかもしれませんけれど、やはり、これはこれなりの意味をもって続けてきたということが、事柄の次第ではないかと思えます。

「社会と情報」という主題の意味は、社会というあり方自体が情報のやりとりなしには成立しないという条件がございますし、情報というあり方もいろいろの定義の仕方はあるかとは思いますが、何らかの形で情報を作り上げていくものと、受け取る側との間の関わりといったものを抜きにしては、情報の特性はわかり難いかと思えます。そこには何らかのいいしれぬ連帯あるいは関係性といったものがあり、それはある意味で一つの社会ではないか、情報を成り立たせる基本的な関係の事態は、そんな集合特性をもっているのではないかということがあります。

しかし、これは明らかに取り扱いの違う二つの概念でございまして、取り扱いの違いはこれに接近される研究者たちのディシプリンによって、変わってまいります。このシンポジウムでは、各々の研究領域、それぞれのディシプリンの中で磨かれて今日まで仕事をしてこられた現役の研究者との討論を通じ、この二つの問題を繋ぐその人の基本的な解き口を互いに垣間見ることを通じて、考えていきたい。

幸いここに集まっていられる方は夫々第一線の研究者でございます。そこで、このシンポジウムで大切とするのは、お一人お一人の肉声となります。ここに幾本かのマイクロフォンがございますが、これは拡声器ではございません。このシンポジウムを記録し、できる限り早く紀要の報告を作り上げるための装置でございます。あくまでもここに流れるのは活きのいい肉声であり、ご自身のトーンでお語りいただくことが、この会合の一番大切なポイントで、こうしてフロアとシンポジウムで講演いただく方の間の隔たりはなくなる、そんな自由なあり方で、討論を進めていただきたいと思います。

なるべく意地でもこれを何十年か続けてまいりたいと思えますが、予算も限りあることがございますから、時に沈没するかもしれない。今、このよい時期に、このお三人の貴重なお話をお聞きできることを、殊の外、私たちは嬉しく思っています。これから二日間、どうぞよろしくご討議をいただきたいと思います。